

## 「閨」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

秋蝶を踏んで慌てる下校の子 水谷 光子

水谷さんの見た下校の子は、低く舞っている秋の蝶を面白げに踏んづけようと足を下ろしたら、何とその蝶を本当に踏んでしまった。その慌てようが可愛い。もしかしたら命あるものを殺めてしまったのではないかという漠然とした罪の意識の芽生え。蝶を踏まなかった他の子よりも逸早く、命の存在に気が付いたかも知れない。

みこまれる娘にいちじくのやはらかき 持田きよえ

胎内に芽生えた小さな命と無花果が何故か響き合う。「やはらかき」にも命が感じられるからだろうか。取合せの妙。「娘」以外みな平仮名表記というのも、この句をより清新にしている。

よく眠る兜太の枯野おもひては 森尻 禮子

編集長時代に金子兜太先生から「俳諧有情」と大きな骨太の字で書かれた返信葉書を見たことがある。それに続けて「鍵和田さんによろしく」と。そう言えば柚子先生も「情」(こころ)を一句の中心に置いていた。形

式より内容を重視。共に辛い戦争を体験し、生きることや命の躍動を大切にしてきた。その兜太の世界はまた物凄く広い。掲出句では枯野という広い懐に抱かれて、作者はよく眠る。花野でなく枯野というのが「俳諧有情」らしい景であると思う。

菊かをる暮色の街に人を恋ふ 八尋 信子

小さい時分、花札から黄色い菊の花を知った。でも、香りは大人になってから。菊は凜と咲きつつ寂莫たる霧囲気を持つ花。この句の作者はその菊の香りにも寂しさ、静けさを感じ、人恋しさを募らせている。「暮色の街」というのも何やら人を恋しさに誘ってくれる。

オミクロン株とふ魔もの年の暮 山下 道子

新型コロナウイルスの最新の変異株であるオミクロン株。ワクチンを二回接種した人も感染しているので、この変異株には更に注意しなければならない。山下さんはこれを「魔もの」と呼んで恐れている。ウイルスには、年の暮も正月もない。

疎開はるか林に食みし瘦せ栗も 山田 雅子

甘栗を美味しく戴く季節なのに、作者は戦前の疎開地での「瘦せ栗」を思い出している。それも林に落ちてい

たのを食べた栗を。疎開という言葉が初めて出たのは、昭和18年9月のこと。工場・建物の疎開計画に始まり、12月には学童の縁故疎開促進が発表されて家族ぐるみでの地方転出が勧奨された。翌19年6月には閣議決定により東京、京浜、阪神、名古屋、北九州などの主要都市の国民学校初等科学童の縁故疎開を実施することになった。三年生以上の縁故のない者は集団疎開させられ、東京では品川区の学童が8月4日に疎開したのを皮切りに9月下旬には疎開が完了、兄妹が散りぢりとなった。以上は半藤一利氏の『B面昭和史』からの引用。戦後生まれの私にはもう言葉がない。作者の「疎開はるか」の一語には複雑な思いが籠められていよう。

### 掛け大根明日天気になああれ 夢 十夜

大根を洗って干す。山の裾野の日差し豊かな所で見掛ける風景だが、福岡太宰府の「都府楼前」駅の近くでも夜明け前に見たことがある。それでこの句、「明日天気になあれ」の「なあれ」を「なあああれ」と無理やり五音に伸ばしてユニーク。晴れを祈る呪文のようだ。

### ラ・カムパネラ流るる師走の駅ピアノ 東 祥子

NHKが放映している『駅ピアノ』『空港ピアノ』は良質の番組。外国から始まり現在は日本で収録した映像

も流れてきて楽しい。駅は単に電車に乗ったり降り換えたりするだけのものではない。人生には時に寛ぎが必要だ。乗り換える待ち時間の中で、駅構内に置かれている一台のピアノに向かい一人の旅人が鍵盤を訥々と叩く。ラ・カムパネラ。フジ子・ヘミングの名演でも有名であるが、駅ピアノで弾く旅人も魂を込めて演奏を楽しんでいる。私たちにとってもそれは正に一期一会。師走であれば尚のこと。駅は人間交差点でもある。

### 足音の遠ざかりゆく返り花 荒尾寿美江

この句の遠ざかりゆく足音は、今は亡き人たちの足音なのかもしれない。その足音が花を返り咲かせたのかもしれない。心象句なので解釈は如何様にも出来る。返り花の周辺に魂が飛び交っているようにも思えた一句。昨年は何故か、いろいろの花が二度咲きして驚いた。

### 検査着はいつもぶかぶか落花生 伊澤やすゑ

心電図などの検査で着替える検査着と落花生の共通点は「いつもぶかぶか」。そう言われてみて、その想像力の豊かさに驚かされた。検査体験が豊富であったとしても落花生までは普通思いつかない。落花生も驚いているに違いない。皆さんも落花生の皮を剥くたびにこの句を思い出すに違いない。

冬ざれて靈峰そこに三島駅 石井 佐知

東海道・山陽新幹線の三島駅は大学教員研修の事務方として一度だけ降りたことがある。研修センターに籠りつきりだったので殆ど覚えていないが富士山の美しい町であったことは確か。この句の作者もまた三島駅に降り立ち、三島富士を仰ぎ一句を得た。「靈峰そこに」と、眼前の富士を我が身に引きつけて格調高く詠み上げている。冬ざれの凜とした真白き富士の嶺。

船底に犇と藤壺ならひ吹く 石垣喜代子

「ならい」は関東で冬の北がかつた風をいう。寒い風だが海は穏やか。その海に停泊している年季の入った船の船底には藤壺が犇々と固着していて、作者はその生きものに興味を持ったようだ。藤壺は岩や船底、他の動植物に固着する。船底に固着すると重くなり燃費がかさむので漁師には歓迎されない。思えば、ならいも藤壺も漁師も、長い付き合いである。

晩学はただわらわらと枯尾花 市村 啓子

「わらわら」は急いでとか、慌ててとかの意味。晩学に燃えている作者らしい言葉である。美しい芒が枯尾花になった情景を我が身に譬えているのだろうが、枯尾花は謙遜だろう。生き急がないでじっくり進みましよう。

ゴール後の万のため息菊花賞 岩根 甲

菊花賞は10月24日、天皇賞が10月31日、ジャパカンカップは11月28日、有馬記念が12月26日。コロナウイルス感染症防止のため競馬場は現在も入場制限しているが、ずっと以前からネット投票システムで馬券が買え、競馬場へ足を運ばなくても入金・出金できる。岩根さんのこの句はコロナ以前の競馬場内での「万のため息」であろうが、テレビやラジオの前の「万のため息」を想像してもよい。その中に作者のため息もある。

夕映えの白鳥の沼第一章 牛込はる子

「第一章」というのがこれから展開されるストーリーの序曲だとして、沼を行く「夕映えの白鳥」の何と美しいことよ。第二章、第三章があるとしたら、どのような情景の句になるのか、これも楽しみ。

着ぶくれて物拾ふにも疲れたり 内海 範子

齢を重ねてくるとすべてが億劫になり、加えて幾重にも着ぶかれて暮らしていると、この句のように、手から滑り落ちた箸や錠剤などを拾うのにも根気がなくなる。本当に疲れてしまった句だが、疲れているのにそれをよく一句に纏めたものである。

生き延びてしかし孤独な冬の蝶 大下 壽櫻

「生き延びてしかし孤独」と詠み、作者の心はこの冬の蝶に同化する。「しかし」が抜群に面白い。本来硬い言葉なのに「孤独」に繋げてみると、孤独を深める働きをするのだ。「しかし」を用いた句ではへすでに午後しかし夜には初夢を 金子兜太が記憶にある。

襟立てて体のどこか野性の血 太田 裕子

「襟立て」は冬の季語。加藤楸邨に「外套の襟立てて世に容れられず」の有名な句もある。厳しい寒さの中で外套や上着の襟を立てることと歳時記には書いてある。掲出句では、襟を立てたことでいつもの自分ではない情感が生まれたのだろう、「体のどこか野性の血」と作者は詠む。思ってもみなかった血の滾りが詩に昇華し結実した一句。

秋日和消防訓練 赤子負ひ 小河原政子

母でも父でも可笑しくはない。赤子を背負って消防訓練に出ている。年配の方は戦時中の防空演習や隣組での軍事訓練を思い出すかもしれない。「産めよ殖やせよ!」「贅沢は敵だ」「一億一心」「撃ちてしまむ」などのスローガンが掲げられた時代。そこへいくと、この句の秋日和は気持ちがいい。秋日和がずっと続いていて欲しい。

綿虫の即かず離れず師の墓所へ 金子かほる

東京は日野市の高幡不動尊に鍵和田先生の墓がある。この句はその墓所を訪ねたときの句だろう。折しも青白い小さな綿虫が作者の前に現われ、墓参の作者を先導するかのようには舞う。即かず離れずとはそういうことと理解した。師の生れ変りとも思える綿虫。いつの間にか、ふつと消えて見えなくなる。

見納めや粗忽長屋の初笑 金子 学

昨年亡くなった落語家柳家小三治を偲ぶ。「見納め」はその小三治の見納め。正月の演目が『粗忽長屋』で、八つつあん熊さんの粗忽ぶりが可笑しいのだが、その嘶へ行くまでの長いマクラが抜群に面白く笑いが絶えない。各演目のマクラだけを収録したCDがあるくらいだから凄。出囃子が「二上りかつこ」。惜しい人を亡くした。

無を語る坊主頭の受験生 金田 知子

お寺に行くとき「無」の掛軸があったりして「無」は馴染みのある言葉だ。「般若心経」では「無無明亦無無明尽」の件などは調子がよく親しみ易い。そしてこの坊主頭の受験生。「無」をどのように語ったのだろうか。作者の今回の作品群には「無音」「無色」が見えられ「無無無無」の面白い句もある。

行く秋や文人気分の雑司ヶ谷 金田 喜子

雑司ヶ谷には霊園や鬼子母神などがある。都電荒川線に乗ると直ぐだ。雑司ヶ谷霊園では夏目金之助・鏡子夫妻の大きな墓を拝むことが出来、また多くの文人たちの墓も立つ。鬼子母神も雑木が魅力的で、石榴の木が御神木ということで驚いたことがあった。銀杏黄葉も散り秋が過ぎてゆく。雑司ヶ谷を歩いていると確かに文人気分にもなる。[行く秋や]にその気分がある。

山茶花の宴のごとく散りしける 菊地 孝枝

散つてまで美しいと思う花は、夏ならば凌霄花、冬ならば山茶花。垣根より零れた山茶花の多くの花片は帯をなし、まだ咲いている花と呼応して一幅の大きな絵を描く。通り過ぎて振り返ること度々。「宴のごとく散りしける」山茶花の宴はまだまだ続くのである。

亀虫に南無阿弥陀仏窓に捨つ 北 好夫

亀虫はここ数年繁殖し、ベランダの干し物にくっつく。それを知らずに取り込み、後で着る時になつてその亀虫に驚くという何を何回か経験している。北さんは優しい方なので生き物を殺めず、窓の外へ放り出す。それも「南無阿弥陀仏」と唱えてだ。私などは家に入った亀虫を輪ゴムで打つたら飛んできて逆襲されたことがある。

寡黙こそ座右の銘や茶の木咲く 栗原 季星

人間、寡黙の時と寡黙でない時とがある。嘶家は職業柄、高座では多弁だが楽屋や家では寡黙な人が多いと聞く。勿論、高座でも楽屋でも変らずに賑やかな人もまた多い。栗原さんは寡黙派だが、言うべき時には言葉を費やすことを惜しまない人。茶垣に黙々と茶の花が咲いて、この花も作者の座右の花なのだろう。

切株を数へ歩きぬ神の留守 小唄あゆみ

切株を幾つも数えて歩くという行為に正直驚いた。普通、誰もしないからである。宅地開発による自然破壊。その検証のために歩いて回ったのかも知れぬが、そういう理由はこの句に限っては要らない。神々の留守中に、時間を掛け丹念に切株を数えたこと。それだけで充分賞賛に値する。

十三夜瑕疵責任を問ふ電話 小泉まり子

この句の次に(紛糾の工事凶面や柿を食ふ)が置かれていたので、この電話は何かのトラブルを意味する。十三夜という少し艶っぽいお月見の夜に、工事の瑕疵責任を問う糺す野暮な電話が突然来て、扱てどうなったのだろう。「十三夜」の持つ情緒に溺れない、現代的な一句。

ストーブの水の沸く音辞書をひく 小濱けえ子

ストーブの回りで勉強でもしているのか、辞書を引いている。ストーブの上には薬缶が置かれていてもう直ぐ沸く気配。何とも静かな時間を過している。湯を沸かす時、薬缶の水の沸騰するまでの音が面白い。薬缶の中のコトツという音、それが速度を速めていき、沸騰間近の湯気が少々吹き上げる。この句では「湯気立て」のために水を沸かしているのだろうか。作者にとつては貴重な沈静の時間帯。

縁小春卒寿の老後あれこれと 小林ゆきお

縁側で小春日を浴びながら老後の心配事をあれこれと考えている。永く生きてこられた卒寿の方が九十以降を「老後」と言っているのが何だか滑稽で、とても健やかな人生を送っているなあと感心させられた。還暦や古稀くらいで「老後」と言つてはいけませんね。

宇宙駅へ十時間とは冬銀河 小林 玲

民間機関の打ち上げるロケットで宇宙空間へ。十時間で宇宙ステーションへ行けるとは『2001年宇宙の旅』のよう。欲を言えば、そこで乗り換えて太陽系外へ行くとかのオプションがあるといい。冬銀河の輝きも、宇宙へ出れば全くの闇の世界だという。冬銀河に乾杯。

高階の病室に見し初日の出 斉藤久美子

病室で年を越した方も多いだろう。私も平成元年の年末から三週間入院していたことがある。その時はこの句の斉藤さんと同様に、高階の病室で初日の出を拝んだ。初日の出の見える病室に患者の幾人かが押しかけ、看護師さんも来てくれて一緒に初日を見たものだった。退院の見込みのある人、ない人。色々の人たちとの一瞬の出会いでもあった。よい年であつて欲しい。

食卓の真ん中に置くおでん鍋 佐藤 和子

角鍋でなく、丸い大きな土鍋が食卓の真ん中にどかんと置かれる。焼豆腐、こんにゃく、大根、玉子、がんも、ごぼう天、はんぺん、つくね、竹輪、さつま揚げ。大阪のおでん屋だと、巾着やロールキャベツ、春菊、シューマイなどもある。沖縄おでんには豚足も入る。ごつた煮の中から好きなおでんを選んで食べられる幸せ。この一句から、温かな家庭の明るい食卓を見せて頂いた。

望郷のずしりと重き柿届く 島 昌子

林檎も蜜柑もあるが柿ほど庶民的な果物はないだろう。柿の木は村中に植えられていて身近な感がある。作者にも故郷の柿が箱で届いた。有り難いことだ。「ずしり」の一語に故郷への熱い思いが滲んでいる。

そんなことあつたかなあと熟柿吸ふ 清水 悠太

忘却は加齢に伴う現象で、永く生きた証のようなもの。自分が幾つか解らない日がいずれ来るとしても悲しむ必要はない。この句のように「そんなことあつたかなあ」と、のほほんと生きたいものである。熟柿を吸つて口元を汚したとしても、この作者を叱らないで欲しい。

大空に「私は自由」叫ぶ秋 首藤 久枝

この句のほかに「お前は何をしたのかと問ふ冬落暉」がある。自分と正直に向き合っている様子が「叫ぶ」「問ふ」から窺える。「私は自由」は、自分が自分を拘束してしまっている一種のしがらみを自ら解放する言葉で、口に出すことで心が平らかになるのだろう。秋の澄んだ大空に思い切り叫んでもらいたい。

紅葉浄土の坂登りゆく寂聴忌 新海あぐり

瀬戸内寂聴も今年惜しまれて亡くなられた方。九十九歳。テレビで幾度もドキュメンタリー番組が組まれ、私たちは彼女の生涯と入退院の様子などを知ることが出来た。全国の彼女を慕う人々は寂庵に駆け付け、その逝去を悼んだ。この句の「紅葉浄土の坂登りゆく」も人生を生き切った寂聴を偲び、冥福を祈る。法話を天職としていた寂聴は今も空から語り掛けてくれている。

百年の重みに応へ柿紅葉 菅原 淑子

百年もの間、実が生り紅葉してきた柿の木。その百年の重み、柿の実の重み。柿紅葉のさまざまな美しい色合いはその百年という歴史の集大成なのではないか。「重みに応へ」は本当にその通りであると思う。

湖霧のワルツか苦悶か膨れゆく 杉淵真喜子

湖を霧が巻き、それがどんどん膨らんでいくという。そしてその霧の膨らみは、ワルツを踊っているかのようでもあり、苦悶しているかのようでもあると。ワルツと苦悶とは真逆の見方であるが、苦悶に見えるというのは一つの発見。

ゆつくりと終る一局柿の秋 鈴木 智子

将棋か囲碁か。礼に始まり礼に終る。この対局はプロ棋士のものであつても、そうでなくても、そのように終始穏やかにゆつくり指すのだろう。柿の秋は柿の実りの秋。一局の終りに相応しい季節の到来だ。

食べ方を説き冬菜売る農学生 鈴木 藤子

農学生が大学の畑で取れた野菜を売りに歩いているのだろうか。それにしても、冬菜を売るのにその食べ方やレシピまで教えるというのは、テレビ通販の実演と似て

いて面白い。絶対に売れると思う。大根、人参、白菜などの食べ方はみんな知っているから、きつと新種の冬菜なのだろう。

松茸を如何にせむとて口々に 高橋満利子

松茸が手に入った、さあどうしようという訳である。揉めているのではなく、松茸飯にするのか、大胆に贅沢に焼いて食べるのか、土瓶蒸しにするのか、各人が意見を言い合っているのだ。さあ、あなたならどうする？

「臨時ニュース」に耳目敏感十二月 高橋美智子

真珠湾奇襲の勝利を告げる昭和16年12月8日のラジオ。「臨時ニュースを申し上げます。本日未明、西太平洋方面において戦闘状態に入れり」の有名な放送は現在でも朝ドラなどで聞くことができる。その「臨時ニュース」の強いメッセージが昨今も流れてきていることに、作者は敏感に反応。「耳目敏感」は言い得て妙である。

（あやまちはくりかえします秋の暮 三橋敏雄）。

菊花展観ての野菊の良かりけり 竹森 美喜

菊師が丹精込めて作った大輪の菊は、神社仏閣で催される菊花展で観ることが出来、様々な賞を獲得した作品には唖つてしまうこともしばしば。ただ、その作品は立

派すぎて自分の現在の暮しと少し乖離があるのも確か。むしろ、周辺の野に咲く菊の方が素朴で、立派に咲こうとは思わず健気である。「野菊の良かりけり」に共鳴。

よれよれと湿原をゆく冬の蝶 田中 京

「よれよれ」とは、刑事コロンボのコートみたいで可哀想だが、日差しが出る日には冬の蝶も飛び、よれよれと飛ぶこともあるのだろう。湿原をとまかくも無事に渡り終えることを期待し注視している作者。

見失ふために見つむる綿虫を 寺田 幸子

綿虫は何処ともなく現われ、何処かへと去って行くのが最後は、「見失ふ」のである。その消えて居なくなってしまうのが案外楽しみで、作者は綿虫の来るのを待っている。「見失ふために見つむる」はその逆説的な言い方で、それほどに作者は綿虫を大切に想っている。

束の間の冬陽人肌めきて墓地 長井 敦子

最後の「墓地」でぞくぞくとした一句。弱い冬の陽が束の間差し込んでいて、それが人肌の温かさだということとは直ぐに理解した上で、それが墓地だという意外性に先ず驚いた。それに加えて、墓地と人肌である。何か出てきそうなのである。怖い怖い。

玻璃窓をたたく木の葉やケトル鳴る 中嶋きよし

窓の外の大樹の木の葉が強風により硝子を叩く。すると今度は沸騰したケトルが鳴る。同時進行、しかもそれぞれ異なる音を響かせるので作者も一瞬戸惑ったことだろう。先ずはケトルの火を消しましょう。それからゆつくり、木の葉の音を聞きましょう。木の葉、ケトル。物で聞かせて成功した一句。

パーキングの「空」皓皓と冬の月 中代 曜子

「空」は「あき」。駐車場の「空」のサインが光る。満車でなく、ところどころ空いているのかもしれない。それは冬の月の照らす下であるから、あからさまに見える筈だ。「皓皓と」でその様子が伝わってくる。この句、「あきこうこうと」の語感が素敵だ。

木々の葉に風が物言ふ暮の秋 中村 敬子

童話にしたら、どのような絵が挿し込まれるのだろうか。風で木の葉の葉擦れの音がしただけなのに、それこそロマンチックに詠まれると何だか楽しくなってくる。風さんはどういう声で物を言うのだろうか。

黄落を揺する歓声回旋塔 中村 東子

ぐるぐるぐるぐる回旋塔にぶら下がった子等が回り始

め、それは空から降ってくる黄落のたくさん葉っぱを揺するほどだ。その子等の歓声、嬌声がとも明るく、遠くの方までよく聞こえてくる。愉しく元気な一句。

流れ星青き地球は波瀾星 中村 幹子

波瀾含みの地球。地球が悪いわけではなく地球環境を大きく乱してきた生き物の日々の営為の積み重ねによる。青き地球のまま、終末時計の針はどんどん進む。その上を星が流れるが、星の流れに身を占つても地球は荒むばかり。コロナウイルスに右往左往したこの二年。流れ星に不吉な兆しを見たのは作者ばかりではないだろう。今年には明るい年でありたいもの。

秋時雨卵は固茹で譲らずに 野沢 慶子

固茹で卵は、ウフ・デュール。沸騰してから大体8分から10分間くらい茹でる。茹で上がったら直ぐに冷水にとり、水の中で剥く。黄身を出して裏ごしするのがフランス料理の「黄身の詰めもの」の基本。私は固茹でも半熟も、出されれば好き嫌いなく食べてしまう。おでん鍋の固茹で卵も弁当箱の半熟卵も共に好きである。そこへゆくとこの作者は「譲らず」という頑なな姿勢を貫いていらつしやる。立派と申し上げるしかない。秋時雨がしとしと降る頃は固茹で卵の方が馴染むのかもしれない。

足跡の化石ジュラ紀の秋の浜 橋本 恭子

ジュラ紀とあるから、この足跡は恐竜のもの。恐竜の足跡の化石から作者は、その恐竜が生きた時代を想像し、また、恐竜の暮らしていた浜辺を思い浮かべたのだろう。尤も、ジュラ紀の時代に「秋の浜」が在ったかどうか。恐竜にとつて環境が変わり常夏の浜が「秋の浜」に移行したのかも知れぬ。そういう想像もできる句である。

一本の紐に空缶鳥威 長谷川菊男

よく見る収穫前の畑。鳥威しは、雀や鴉などに襲われないよう畑の回りにキラキラしたテープを施したものが、音で威す場合にはこの句のように空缶を吊す。親戚の叔母などに聴くと、昔は畑へ出て鍋などを叩き鳴らして鳥を威嚇したとか。「一本の紐に空缶」のリズム良し。

コーヒーの湯気に差し込む冬日かな 畑野 竹代

何とものんびりした句で、こういうゆとりのある暮しをしてみたい。珈琲カップから上がる湯気。そこに差し込む柔らかな冬日もゆらゆら上がっていくようである。カップから伝わる手の温みも冬ならではの感触だ。

小春日や家解体の土匂ふ 浜田 優子

作者が家の解体で感じたのはブルドーザーが掘る土の匂

いである。普段の暮らしては土の匂いなどあまり感じないものだが、解体すると元の土の匂いが掘り返される。小春日が差しているとは言え、この匂い、作者には廃墟の匂いに感じられたかもしれない。

ドロップ缶を飛び出す薄荷小鳥来る 原田ミチ子

白い薄荷が飛び出すのはサクマ式ドロップス。どうやったら薄荷のドロップが先に出てくるか、私もちっちゃな頃に何回か缶を振ってみたことがあるが、そう簡単には出てきてくれない。「小鳥来る」秋の爽やかな季節にこそ舐めたい薄荷。「缶を飛び出す」に喜びを感じる。

隣人の生存を知る大くさめ 平野 豊雄

「生存」とは大袈裟なと思うが、昨今は隣近所との付き合いが希薄なので掲出句のようなこともあるのだろう。生きている証が「大くさめ」というのは喜劇なのか、悲劇なのか。でも、ともかく生命反応があったわけなので、何よりと言うべきか。粛々と暮らしていても嘔はする。

離れたくない離れたくない银杏黄葉 平野 美子

银杏の散り際を詠んでいるのだが、「離れたくない」を二度繰り返してみると、何だか幼児が駄々を捏ねているようで、俄然面白くなった。银杏がとても綺麗に感じる。

「夢芝居」など唄ひゐて近松忌 福井 芳野

大阪の近松門左衛門の墓に詣でたことがある。西鶴の墓と同じ地域にあるが、近松の墓はガソリンスタンドの横の細い通路の先にひっそり立っていた。以前は寺の中にあつたのが、寺の移転の時にそのまま取り残されたという。そんな近松の命日を想いながら作者は、なんと♪「恋のからくり夢芝居／せりふ一つ忘れはしない」という梅沢富美男の大ヒット曲（作詞作曲＝小椋佳）を唄つたという。ご同慶の至り。

皮手套人殺めたるごとく剥ぐ 舟生 信子

スリラー映画を見るような場面。皮手袋は少しきつめの、ぴたつとフィットするものの方が殺人には見栄えがする。昔の映画ではジャック・パランスなんか実に怖かった。舟生さんは人を殺めないとはいえこういう仕草に憧れはあるのだろう。

わたくしがつけてしまった桃の痣 本多 遊子

やさしく扱ってやらないと、このような痣が出来る。誰でも一度は痣を作ったことがあるだろう。お客様用の桃でなく自分用の桃であつたとしても、作者は「やっちゃった」と後悔をしている。「わたくしが」とわざわざ名乗っているのは面白がつているのではない。深い懺悔。

## 閏句会のお知らせ

2月23日（水・祝日）午後一時十分開場

会場 国分寺労政会館 第四会議室

J R・西武線「国分寺」駅南口徒歩七分

3月21日（月・祝日）午後一時十分開場

会場 台東区民会館（浅草）第五会議室

地下鉄・東武線「浅草」駅下車徒歩十分

※4月は国分寺、5月は浅草での句会開催を予定。

◎会費 千円（当日承ります）

◎当季雑詠・四句（未発表句）

「閏」内の句会で既に発表した句はご遠慮ください。

◎欠席投句する場合は開催日の五日前に発行所まで

①句を書いた短冊、②四句と名前を書いた用紙、

③返信封筒、④参加費千円を事前郵送すること。

ただし、句会が休会の場合には投句できません。

◎問合せ先 閏俳句会（080・6770・5485）

※コロナ感染状況によっては休会にします。